「オカルト」と新宗教

桐山靖雄（1921－2016）の思想を中心として

韓　相允
東北大学大学院国際文化研究科博士課程

本研究は、日本の新宗教団体・阿含宗（1978 年設立）の教祖である桐山靖雄が 1970 年代に発表した密教書を中心に、日本の宗教思想と大衆文化の相互関係を検討する。高度経済成長の終焉を迎えた 1970 年代の日本社会では、公害病問題など経済発展の負の側面が顕在化し、物質中心の社会に対する批判的な声が高まっていた。それとともに、急速な近代化への反動として、多くの人々が霊的世界や超自然的現象に関心を寄せ、いわゆる「オカルトブーム」が巻き起こった。心霊現象や妖怪など多様な素材がこの時期に注目を集めたが、中でもブームの中心となっていたのは超能力であった。1960 年代から SF 小説、漫画、アニメの人気題材であった超能力は、1974 年にイスラエルの超能力者ユリ・ゲラーが来日したことを契機に、最も大きな話題となった。

桐山は 1971 年から一連の密教書を発表したが、彼の密教論の特徴として注目すべきは、超能力を前面に打ち出していた点である。例えば、彼は『変身の原理――その持つ秘密神通の力』（1971 年）、『密教――超能力の秘密』（1972 年）、『念力――超能力を身につける九つの方法』（1973 年）などの書籍を出版し、密教修行を通じてだれもが超能力者になれると主張した。このような主張は荒唐無稽に思えるかもしれない。しかし、彼の密教論は「オカルトブーム」時代の大衆のニーズを的確に捉え、当時かなりの関心を呼び起こした。すなわち、彼は近代の限界を乗り越える方法として超能力を提示し、その能力を養う自己啓発の手段として密教を再解釈したのである。さらに、「オーソドックスな」密教ではないと批判されたものの、彼の密教論は伝統教団側にも一定の影響を与えた点で、注目に値する。

以上の内容を踏まえ、本研究は桐山が当時の大衆文化において流行していた超能力をいかに日本の仏教思想と接続させ、再解釈したのかを検討する。この作業を通じて、同時代のトレンドと交渉しつつ展開していった戦後日本の宗教風景の一側面が明らかになると思われる。

キーワード：　1970 年代、オカルト、桐山靖雄、密教、超能力